原著論文

公民教育研究

―「子ども観」の変遷とこれからの学校教育について―

A Study on Civic Education

― Concerning changes in a view of child and school education from now on ―

藤井　一亮*
FUJII Kazuaki

要旨：最初に各時代、また各論者によって子どもが如何に捉えられているかを概観する。次に変化の中にある子どもを学校は如何に教育すべきか、また教育に関して社会に何を求めるべきかについて述べる。

スパルタとアテナイはその政治的形態からいって対極を示すものとして考えられているが、こと、子どもに関しては、若干の相違はあるものの、基本的には、ともにポリスの未来の防衛を担うものとして、教育されなければならないと考えている。それゆえ、ギリシアでは大人と子どもは明確に区別され、全ての大人が全ての子どもを教育すべきであると説かれている。

中世には、アリエスによれば、大人期と区別された子ども期は存在してはいなかった。人間は生物的に保護されなければならない時期（乳幼児期）を過ぎると、大人の仲間入りをしたのである。

ニール・ポストマンやマリー・ウィンは、アリエスの影響をうけながらも、独自の見解を示している。二人は、近代はじめ、一旦、成立した子ども期、つまり大人から隔離・保護されるべき存在としての子ども期が、現在、社会の変化に従って消滅しだし、両者の境界が曖昧になってきていると論じる。そして、子どもらしくない子ども、大人びた子ども、大人の価値観を持った子どもの登場を示唆している。

さて、現在の学校には、まさに市民的感覚を抱いた子どもたちが現れている。事例をあげながら、彼らのエートスの最たるものが、全てを商品交換とする市場原理主義的ともいえるところの思考と行動であることを示した。学校がこの思考と行動に席巻されることは、決して子どもの豊かな成長ためにはならないことを提起した。同時に、筆者は境界が溶解することにより、今度は逆に、子どもっぽい大人が生まれていることを指摘した。件の大人は、挫折することなく、わがままな子どものまま成長したため、深く自らを顧みることなく、子どもっぽく、あらゆるものをストークするのである。

これからの学校は、教育には独自の領域と論理・思考があることを社会の側に提起し、理解を求めなければならない。

キーワード：子ども期、小さい大人、子どもっぽい大人、ギリシア、市民的感覚、市場システム

1　はじめに

「子ども」がわからなくなった。

一つのエピソードから始めようと思う。

「二十年余り教師をし、自分の経験から構築してきた『生徒』というもののイメージが、今日ほど壊れたことはない。」「先生、どうしたのですか。」「煙草を吸っている生徒が二人いたというので、一人ひとり別個に聞いてみた。一人は、『自分は吸った。そこにいた友だちも、もちろん、一緒に吸った。』と答えるのだ。もう一人に聞いてみると、『彼は吸ったが、自分は吸わなかった。』と言下に否定するのだ。私が『一緒にいた友だちが一緒に

＊甲南大学教職教育センター教授

吸ったと言っているのだが・・・。』と水を向けても、彼はその友人に特段の怒りも示さず、平然と、『いや吸っていない。』と、言うのだ。この二人は、私が見る限り無二の親友のように映るのだ。自分が、驚いているのは、煙草云々ということを別にしても、一方は、他をかばうこともなく、簡単に、一緒に吸ったと言い、もう一方は、そのことが事実でないなら、抗議の一言ぐらいは出るはずだが、私が『二人しかいないのに、こんなに矛盾していては困るじゃないかなー。』と言うと、その生徒は『困りましたね。』と全く他人ごとのように言うのだ。」

この話は、1970年代中頃のことである。この先生は1950年頃に高等学校教師になり、その人となりは他の先生方からも尊敬され、生徒からも慕われていた。当時は学年主任という立場にあった人である。その人が「わからなくなった」と頭を抱えたのである。

それ以降、今日に至るまで、学校現場では、これに類する話をよく耳にするようになった。現場・現物を教師に押さえられても、ひどい場合は吸っていない、と強弁する生徒が登場する。このような生徒たちが増えてくる中で、彼らに対応する時は、「教師は刑事よろしく、一人ではなく複数で」と、よく言われるようになった。今ではこの方法が定式化されている。

ベテラン教師が、それまでの体験から作り上げてきたある種の潔さをもった子どもたちは、一体どこへ行ってしまったのだろうか。

この問に答えようとするなら、つまるところ、子どもとは何であるのか、学校とは何のためにあるのか、もしくは子ども時代とは人の生涯においていかなるステージにあるのか、また社会は子どもを如何に見ているのか、という種々の問に、あらためて答えなければならない。今、少し歴史を振り返り、子どももしくは子ども時代についての様々な見解・解釈をたどり、それらの議論・主張が、山積する課題を抱えている現代の学校教育に活かせられるとするなら、それらは何であるかを探っていきたい。

2　子どものすがた

(1) 古代ギリシアの子ども

スパルタ式教育という言葉は、現代においては、厳しい教育の代名詞のように使用される。

実際、スパルタでは、生まれた子どもは厳しく審査され、健常な赤ん坊だけが、母親に戻され育てられたのである。そして少年たちは、7歳になると個々の家より公立の寄宿舎に連れてこられ、集団教育を受けた。そこで、いくつかの組に分けられ、ともに遊び、ともに躾られたのである。彼らは肉体的にも精神的にも苦難に耐える優れた兵士になるために、日々厳しい訓練・教育を受けた。その中で生命を落とす子どももいたといわれている。大人が子どもたちを監視し、子どもが失敗すると、時を移さず厳しく戒めたり罰を与えたりしていたのである。

少女たちもまた体育訓練に励まなければならなかった。というのも将来、立派な兵士となるべき子どもを生まなければならなかったからである。

このような関係は、スパルタの対極のように思われているアテナイにても本質的に大きくは違ってはいない。たしかに、スパルタのように国家的に集団教育をすることはなかったが、子どもは7歳ぐらいになると私立の個人塾というか、日本でいうところの寺子屋のようなところに通い初等教育を受けている。こどもたちの躾は厳格で絶えず監督され、体罰は当たり前のことであったといわれている。アテナイ民主制といわれているが、その内実は重装歩兵の民主主義と言われるように、アテナイにとってもスパルタ同様、自衛、自治、自足というのがポリスの基本的な在り方であった。子どもはポリスのために育てられたといっても過言ではない。それゆえ古代ギリシアにおいては、大人と子どもの区別が明確であり、子ども時代は訓練、教育を受ける時代と考えられる。(1)

ただ、アテナイの場合、スパルタと違って、少女は少年のような教育を受けてはいなかった。そればかりではなく、一般に、女性が人前に出ることは良いことだとは考えられていなかった。アテナイの指導者ペリクレスが、ペロポネソス戦争の

戦死者を追悼する演説の中で、戦死者の未亡人の名誉をも讃えたあと、次のようなことを述べている、「この度、夫を失うこととなった人々に、婦徳について私から言うべきことはただ一つ、これにすべてのすすめを託したい。女たるもの本性にもとらぬことが最大のほまれ、褒貶いずれの噂をも男の口にされぬことを己の誇りとするがよい。」(2) と。つまり、自分の名誉を汚さぬように、男たちの話題の中に良い評判も悪い評判も立たぬようにせよと言っている。考えてみると、「悪い評判」を立てるなということは理解できる。だが、「良い評判」も立てるなということは、一瞬、理解に苦しむ。しかし、家に引き籠もってさえいれば、如何なる評判も立たぬということであれば、よく理解できるのである。アテナイではアゴラ（広場、市場としても使われていた場所）での買い物などは男性の仕事とされており、女性は家庭で糸を紡いだり布を織ったりするのが常であったようである。スパルタのように、女性も男性と同じように、全裸で体育競技をするなどということは決して許されるものではなかった。

しかし、ソクラテスは、女子にも教育を受けさせるべきだという思想を抱いていたようである。彼は著書を残していないので、彼の思想は弟子のクセノポンやプラトンの著作による他はないのであるが、彼らの伝えるところを見ておこう。

クセノポンにプラトンと同じく「饗宴」という作品がある。饗宴の最中に、余興として芸人たちが出てくるところがある。その中の少女が巧妙な技を披露するのを見て、ソクラテスは「諸君、この少女がやっていることにおいても、また、他の多くのことにおいても、明らかに女性の自然的な能力というものは、まさに男性のそれよりも劣っているものではない。判断や力強さにおいては欠けてはいるものの。そこで、もし、君たちの誰かが結婚をしているのであれば、自分の妻に、知らしめたいと望んでいることは何でも、確信をもって、教えるべきである。」と語っている。(3)

プラトンは「国家」のなかで、ソクラテスに次のように語らせている。男性と女性を全体として比較すれば、女性の方が弱く劣っているようだが、しかし、女性が男性よりも優れている例もまた多くある。自然本来の素質は両方に備わっているのだから、女性の故に従事してはならないような仕事があるわけではない。男性のなかにおいても、仕事に向き不向きがあり、女性のなかにおいても、仕事に向き不向きがあるだけである。それゆえ、ポリスの守護の任に就く才能を持った女性は、同職の男性と同様に音楽・文芸と体育を学ばねばならない、と。つまり、男性の受ける教育と別々のものであるはずがないというのである。(4) このように思想として少女の教育もアテナイ人の一部では考えられていることを、ここでは指摘するにとどめたい。

ギリシアの教育は、ポリスによって種々の違いはあるが、一人前の市民になる前に子どもたちはポリス（国家）のために、また良き市民になるために、家庭から出て、今でいうところの学校で、子どもとして学んだのである。それゆえ、成人と子どもは明確に区別されていた、といえる。

(2) 中世ヨーロッパの子どもたち

現在、このテーマを扱うとすれば、フィリップ・アリエスの『＜子供＞の誕生』によらなければならないほど、ここに展開される議論は、その後の子供論に大きな影響を与えている。(5)

彼の方法は、政治経済社会の大きな動きからではなくて、個別の資料、それは絵画であったり、また日記、手紙や墓碑銘などの文書であったりするが、それら膨大なものの集積から、その当時の精神構造もしくは思考様式や社会的な意識の在り方（マンタリテmentalité）を探究するものである。このような方法によって、彼は人間の生や死、性、出生等が、生物学的で自然的なものに属し、変化のないものと見なされてきたが、そうではなくて、それらは極めて、文化的な概念であると主張した。マンタリテの研究を通して、人々の自覚的ではないところの集合意識を探りうると考えたのである。そしてこの自覚的ではない集合意識を探る中で、文化概念である「子ども期」も時代によって大き

く変化しており、この観点から、中世社会において、子どもが如何に映じていたのかを探究するのである。

彼は、中世においては、大人と厳然と区別された子ども期という観念も、子供を教育して一人前の大人にするという観念もなかったという。子ども期という観念は近代社会になって誕生したもので、それは近代的な家族の形成と時を同じくしているという。近代的というか、さらに踏み込んで現代的な家族という言葉でイメージされるものは、ごく親しい少数の親族による集団であり、親子、夫婦の愛情に満ちた関係、さらには養育や教育に対する強い関心を持つもの、ということになろうと思われる。そして近・現代的家族の特徴は、それが、「人々が、そこに留まるのを愛し、それを思い起こすのを愛する、閉じられた社会」(6) となっていることである、とアリエスは言っている。つまり社会に対する排他性と閉鎖性をもっており、子どもたちをその中に閉じ込めてしまうということである。しかし、中世の家族は、閉鎖性をもっていなかった。アリエスは、「昔の生活は、17世紀までは、公衆の面前で行われていた」、「たとえば結婚式に伴う伝統的儀式、新婚の床の祝福、すでに床に就いた新郎新婦への招待客たちの訪問、婚礼の夜をあげての騒々しい踊り等々は夫婦のプライヴァシーにまで社会が介入する権利を持っていた」のであり、「事実上、いかなるプライヴァシーも存在せず、四六時中来客の無遠慮にさらされている家の中で、主人も奉公人も子どもも大人も、各自がそれぞれ混じって暮らしていた時代にあっては、このようなことで気分をそこねることなかったであろう。社会的に稠密であったために、家族の占める場所がなかったのである。」「家族は意識や価値としては存在していなかったのである。」(7) と述べている。だからこそ、中世では、子供は7歳ぐらいになって、その母親、乳母あるいは子守役の絶え間ない心遣いや介助がなくても暮らしていけるようになると、つまり自分で身の回りのことができ、他人と話し言葉によるコミュニケーションがとれるようになると、すぐに大人たちと一緒にされていた。子供は大人たちと同じ環境の中で徒弟修業に入り、一挙に大人の大共同体の中で生活をするようになる。そこでは子供は<小さい大人>であり、大人とともに働き、遊び、学び、また性的な話にも頓着なしに加わっていたのである。いうならば、子供の社会化は、家族によって保証されるものでもなく、監督されるものでもなかった。子供はすぐに両親から引き離され、数世紀にわたって、その社会化は<小さい大人>が大人たちと混在する徒弟修業によって保証されていた。(8)

また、彼は言っている、当時、乳幼児の生存率の低さは、医学的水準の低さだけではなく、両親の寝ている寝台の中でごく当然に生じうる事故として窒息して死に、事故という形で処理されたこともあった。ある程度育ってくるまでの子供は人としての数には入れられていなかったし、それほど、かけがえのないものとしては見られていなかった、と。この考えは17世紀モンテーニュのエセーの中にも残っていると以下のような引用を行っている。モンテーニュは言う「私はまだ乳飲み児であった子供を二、三人亡くした。痛恨の思いがなかったわけではないが、不満は感じなかった」、(9) と。このような事情は、日本のことわざ「七つまでは神のうち」、つまり、7歳までに亡くなれば、人の世にでる前に住んでいた神の世に戻っていったのだとする思いと軌を一にするものである。子供が、その生存の可能性が不確実な、この死亡率の高い時期を首尾よく通過するとすぐに、まさに人の世、大人と一緒にされるのだった。

彼の所論を、簡潔に結論づけようとすると、以下のようになる。

中世の文明は、本論2の（1）でも述べたギリシア人の教育（パイデイア）を完全に忘れ去っていたし、近代人たちの教育も未だ知らずにいたのである。本質的なことは、中世文明が教育という観念を持たないことである。このような中世的な在り方が、17世紀以来、重大な変化が生じてきた。教育の手段として、学校が徒弟修業に取って代わってきたのである。つまり子供は大人の中にまざり、

大人と接触しながら直接に人生について学ぶことをやめたのである。子供は大人たちから分離されていき、世間に放り出されるに先だって一種の隔離状態の下に引き離された。この隔離状態がいわゆる学校である。ここにおいて子供が大人から切り離されて、近代的な子ども期というものが誕生したのである。そして、子供をめぐって組織された近代的な家族意識の成立がこの傾向を助長したのである。

かつては、人間はごく小さな子ども（乳幼児）から一挙に、小さいというか幼いというか若いというかは別にして、大人になっていたということである。つまり、人の一生というものは、乳幼児期と大人期に二分されていたということである。ここには、われわれが「子ども」と呼んでいる少年少女期は存在しなかったし、意識化もされていなかったということである。

イタリア大学史・教育史についての深い研究から、児玉善彦は、アリエスの立論について、それが多くの重要な視点を与えるものではあるが、「イタリアとフランスとの違い」や、また「中世末期から近代初期にかけての農村文化と都市文化の相違を十分に考慮に入れたのかどうかという点についても疑問が残る。」(10)、としている。そして彼は、残存していた古代ローマの都市的伝統のうえに商業を復活させたイタリア諸都市の現実的な要求が、俗語の読み書きを教えた「子どもの教師」、算術や簿記などの会計学の初歩を教える「ソロバン教師」、「公証術の教師」、「ラテン語教師」（当時の商業活動は厳密な契約で行われていた。その契約書はラテン語であったので、都市商人層には必要不可欠であった）を生みだしたとしている。(11)

アリエスの場合、膨大な資料に基づいて論を展開しているが、上で見たように、大人と子どもを峻別する文化から生じる古代の教育の衰退を社会経済的に考察しているかというと筆者には明示的には語られていないように思われる。やはり、古代に隆盛を見ていた商業の衰退が、農業を中心とする封建的な地域主義を導き、生活の仕方も自給自足的な簡単なものになっていったので、そこでは大人と子どもを区別する必要はなかったということをも押さえるべきではないかと考える。

3　子供期の成立そして子供期の消滅

（1）ニール・ポストマンの場合

1)「秘密」を特権としてもつ大人

アリエスの論に影響を受けたニール・ポストマンは、その著『子どもはもういない』（原典初版1982年）の中で独自の子供論を展開している。彼は、子どもと大人を分けるようになったのは、近代になって、活版印刷術の登場が大きな原因であるとする。(12)

また、彼は印刷術が原因であるという議論の前提として、大人と子どもを分けるものは、秘密の存在であるとする。中世においては両者間において秘密は存在していなかった。子どもから、何かを隠すという文化は存在しなかった。というのも、大部分の人に読み書きの能力が欠けていたからである。大事な社会的交流は口頭で、顔をつきあわせて行われていた。したがって、大人の日常の事柄は、金のことであろうと、暴力のことであろうと、犯罪のことであろうと、性のことであろうと、ギャンブルのことであろうと、子どもにとっても日常のことだった。聞き話す能力は、生物学的、遺伝子的に、我々に組み込まれている。しかし、読み書きの能力は文化的産物と考えられる。

印刷術の発展により膨大な印刷物が登場するようになると、コミュニケーションの質が大きく変化するのである。グーテンベルクは、葡萄搾り機を本作りに結びつけることを考えたのであるが、多くの発明品や機械のように、それらは一度でき上げってしまうと、発明者の意図をはるかに超え、大きく社会や制度、文化の在り方、我々の心の習性まで、変えてしまうのである。

あらゆる印刷物は、大事な秘密を集め保存する。こうして読み書きの世界で大人になるということは、自然ではない記号（シンボル）に編成された文化的秘密に預かることを意味する。読み書きの世界では、子どもは大人にならなければならない。けれども、読み書きのいらない、聞き話すだけの

世界では、子どもと大人とをはっきり区別する必要はない。したがって、中世の世界では、子どもの発達という考え方や必修科目とか段階的な学習という考え方、学校教育を大人への準備と見る考え方はなかったといえる。

印刷機は、識字能力を根拠にした大人の新しい定義を、したがって識字能力のなさを根拠にした子どもの期の新しい定義をつくり出したのである。この新しい大人期は、中世の子どもをはっきりと除外したのである。そして子どもが大人の領域から追放されていくにしたがって、子どもが定着するもう一つの領域を見つける必要があった。そのもう一つの領域が子ども期として我々の前に現れるようになった。

この読み書きの能力を身に付けるには長い時間がかかるのである。この習得のために子どもは隔離され、学校で教えられなければならないのである。ここに我々の言うところの、子どもの誕生を見たのである。

子どもという観念ができあがっていくにつれ、社会が、子どもからたくさんの秘密、すなわち性的関係についての秘密だけではなく、社会関係についてのあらゆる秘密を集めたのである。言葉の秘密―子どもたちの前で口にしてはならぬ言葉―さえあらわれた。つまり子どもと大人の重要な違いのひとつは、大人が、子どもは知らなくても良い情報、換言すれば大人だけの秘密を所有していることにある。

2)「秘密」が秘密でなくなる時

以上のような議論を展開するポストマンの論理に従えば、大人と子どもの区別が生物学的な類別ではなく、文化的な産物である限り、両者の間にある秘密が秘密でなくなれば、両者の区別はなくなり、したがって、子ども期は消滅するのである。

ポストマンは、何が子ども期を消滅させるのかについて自問し、それはテレビに代表される映像メディアであると自答する。

人びとはテレビを、見るのである。読むのではない。聞くのでもない。見るのだ。これは大人にも子どもには当てはまるのである。そしてテレビを見るのに、特別の技能はいらないし、テレビを見たからといって技能が発達するわけでもない。テレビを見れば見るほどテレビを見るのがうまくなる子どもも大人もいない。また、テレビを見る力がないということも耳にしたことがない。6・7歳の子ども60・70歳の人も、テレビに映ることを見るということについての資格は平等である。皮肉を込めていうならば、テレビは極端に平等主義的なコミュニケーションのメディアである。ここにおいて子供と大人の区別は生じない。

この原著が出版されてから、30年以上が経ち、著者も恐らく知らなかったと思われる映像メディア、インターネットやスマートフォンも、猛烈な勢いで普及している現在、読み書きによるコミュニケーションの世界で、大人が有している秘密への憧れや、辛抱して鍛錬し、学びの方法や技術を手に入れる喜びなどが、子どもから消滅しつつある。かつては、大人しか知らなかった、それも新聞や雑誌で文字情報として得ていた政治生活や社会生活の暗い、あるいは好ましくない私的な面は、その大部分が大人の関心事であり、子どもが関与することではなかった。

しかし、子どもはテレビの視聴者である。画面上に秘密はない。それなりの社会的地位や役目を担った大人たちが毎日のように頭を下げ、お詫びをしているすがたが公開されている。大人への憧れはなくなり、かわりに、大人への皮肉や無関心、ひどい場合は軽蔑の念すら抱く。また、大人も子どももみんな同じ、すべて平等といってもいい感覚を抱くようになる。大人と子どもが同じ権威しかもたない世界では、権威そのものが存在しない。すなわち、断絶はなくなり、すべての人が同じ世代に属するようになる。したがって、ルールもマナーも同じ、言葉遣いも、その内容も同じでかまわなかった14世紀に逆戻りをするのである。そして子ども期は消滅するのである。

このようにポストマンは子どもと大人の境界の消滅を説くのである。

（2）マリー・ウィンの場合

1）子どもっぽかった大人たち

彼女も、ポストマン同様アリエスの大きな影響を受けている。彼女は、アリエスの論を自分の解釈を交えながら、簡単に次のようにまとめている。

子どもの生活を大人の社会から隔離し、子どもの時代を人生の特別な時期とする考え方が一般に普及したのはせいぜい過去二百年の間だけであった。また、それ以前、中世から17世紀頃までは、子どもは、６、７歳を過ぎるともう保護を必要としないものと見られ、騒然たる中世社会の一員として、大人同様に働いていたし、遊んでもいた、と。そして彼女は、アリエスがその要因論には深く踏み込まず事実を積み上げる方法をとっているのに対し、こどもが大人同様であることについて、独自の論を展開している。(13)

数百年前、農業と手工業中心の社会では、糸つむぎ、織物、かご細工、ろうそく作りなどの作業が子どもも動員して家庭内で行われていた。つまり当時の作業は子どもにもできる単純なもので、大人と子どもが同じ仕事をしていたのである。現代の進歩的な学校ならば、図画工作の時間やキャンプで子どもたちが楽しんでいる作業である。中世の農業も同じように、子どもでも出来る仕事が大半を占めていた。植える、耕す、刈り取るといった作業は、少なくとも強制されるのではなく、「科学実習」「体験活動」と銘うって自主的作業の形をとっていれば、今日の子どもにも魅力のある仕事である。

日本においても、高度経済成長期以前、農業がまだ基幹産業として位置付いていた時代、農繁期になれば、「猫の手も借りたい」といわれ、学校にもまだ農繁休暇というものが存在し、子どもたちも農作業に動員されていた。もっと時代を遡れば、「百姓には学問はいらぬ」といわれ、農村の長男が上級学校に進学することに対してブレーキがかかっていたことを思い起こしても、ウィンの指摘も良く理解される。

また娯楽においても、中世では子どもを仲間に入れてもおかしくないと考えられていた。今では子どもの遊びの中に入れられるものを、大人も楽しんでいたし、また、子どものおとぎばなしと一般に考えられているグリム童話を大人も楽しんでいたのである。ウィンは、要するに、「現代の感覚からすると、昔の大人は子どもっぽかったようである。後の複雑化した社会の大人に比べれば、行動も考え方も単純だったからこそ子どもっぽく見えた。また、自由奔放に振る舞い、人目を気にしなかったという意味でも子どもっぽかった」(14)というのである。

彼女の場合は、子どもが小さい大人であるというよりは大人が大きい子どもといってもいいとされている。筆者は、もう一歩踏み込んで、この間の事情を、以下のように解釈したい、人間というものは、幼き生き物として、生存のために保護される時を過ぎれば、つまり自分で働けるようになると、「ひと」になるのであって、大人も子どももないのである、と。このように推論すると、「ひと」の子ども期の成立は、同時に大人期の成立であると考えられる。子ども期の成立を問うことは、「ひと」が、何故、大人にならねばならいのかを問うことと同じになるのである。その子どもが、子どもとなり、大人が大人となるについて、彼女は次のように述べている。昔の農業や手工業の世界では、たいして訓練を受けなくても子どもは大人と同じように、もちろん仕事量の多寡はあるだろうが、働き、天性の勇ましさや独立心を仕事に発揮できた。ところが、都会化、官僚化が進んでいくと、子どもは長い時間をかけて、しっかり鍛えなければ習得できないような技術を要求されるようになった。そうなると子どもは読み書き計算という学問を身に付けなければならないだけでなく、新しい行動パターンを覚えなければならなかった。そのうえ、複雑な経済社会では、子どもの労働力の需要が減ったため、少なくとも中流家庭の子どもたちは幼いうちから働く必要ななくなった。その代わりに子どもたちは学校に通い同年輩の仲間と過ごすことになり、大部分の時間を大人の社会から切り離されて過ごすようになり、さらに慎重な結論として、子供が無邪気さを失わないように

しようとする風潮が生まれたので、もう子どもには大人の世界の現実を知らさなくなった。その結果、子どもたちの行動に子どもらしさが目立つようになった、と。[15] 同時に、筆者は、ウィンの説を発展させれば、また、大人は大人らしくならなければならなかったと考える。つまり、子どもを大人の世界に引きいれ、両者を区別しないことで、子どもに封建社会を生き抜く準備をさせていたが、子どもが変化しつつある新しい社会の中で、生き抜いていく力を付けるために、以前とは反対に子どもを大人の世界から積極的に排除し、また大人自らも、以前の子どもっぽい大人から脱皮した大人らしい大人になっていかねばならなかった。

2) 保護から準備へ

日常の振るまい、言葉づかい、平気で口にするいろいろな知識、どれをとってもあの子たちは根本的に違っている。

どういうわけか、今はかつて子どもの世界と大人の世界を分けていた明確な境界線がぼやけてしまった。幼い子どもたちが大人の世界に足を踏み入れたり、現実を知って悲しい思いをしたりすることのないように保護していた皮膜がどういうわけが弱くなってしまった、[16] との直観から、マリー・ウィンは考察を始める。

彼女は、ジャーナリストの本領を生かし、数百人の子どもを含む大勢に人々、そこには父親・母親や医師、教育者も含まれるが、これらの人たちにインタービューを重ねた結果に基づいて論を進め、「皮膜が弱くなった」ことの主なる要因は、子どもに対する社会の姿勢、別言すれば、子どものあつかいかたが変わったことにある、と述べるのである。そして何故変わったかの理由については、アメリカ社会において新しい育児法の普及、つまり、「親子は仲間という育児法」がアメリカ社会を席巻するようになったからという。彼女はその底に流れる心理学がフロイトのエディプス・コンプレックスであるとする。大人も子どもも本質的には同じであり、大人の行動もこどもの行動も同じ解釈ができるとする考え方のもとでは、それ以前のロマンティシズムに酔い、子どもを無邪気な幼き者として理想化されていた社会は、その姿勢を変えざるを得なかった。[17] そのほかの理由として、二つの大きな社会変化、つまり、社会における女性の地位と今日では非常に不安定になっている夫婦関係との変化であるとする。そのほかテレビの普及、性の解放革命、加えて大きく、政治の劣化や経済状態の悪化をあげている。

このような状況のもとで、どこの親も、昔のように子どもに何をなすべきかを指示することもできず、かえって親自身の問題を子どもに打ち明け理解させ、同意を得たり、また許しを請おうとする。今日、子どもの前で取り繕う親はもういない。精神的には子どもも大人と平等になってしまった。[18] 彼女は、アメリカ社会が、子どもを保護するというよりは、早く大人になる準備しておくことがよいと考えられるようになったという。うらを返せば、今日のように社会が複雑化し、大人中心の社会になると、子どもも自らの黄金期としての子ども時代を潔く捨てて、早く成長していくことしかないのである、[19] と。

ポストマンやウィンが、上に述べたように、現代は文化的に見て、いわゆる子ども期が消滅しつつあるように思われる。近代に華々しく登場した子ども期の観念は、大人の側の条件が、つまり独自の秘密の保持であったり、大人はかくあるべしといった思考と行動の様式が崩壊しつつあるので、大人と子どもを隔てていた境界・輪郭が曖昧になってきた。ここにおいて、大人のような子ども、子どものような大人の登場を見ることになるのである。筆者は彼らの主張を敷衍すれば、大人の価値観を持った子どもの誕生、反対に子ども的な判断、つまり、ものごとを複雑相において認知することのできぬ大人の出現ということになるのではないかと考えている。このことが、現在学校に生起している種々の問題の一因とも考えられる。

4　子どもが「学校内存在としての子ども」を拒否する時代

(1) 自立した市民感覚を持つ子供の誕生

再び、「はじめに」として述べた「子ども」がわからなくなったという学校現場に戻ってみよう。「わからなくなった」と言う学年主任の前提となっていた感覚というは、生徒というものは、時々煙草を吸ったり、カンニングをしたり、けんかをしたりするものだ、いわゆる悪いことをすることもあるのだ、しかし、生徒は、それが発見されると、悪いことをしたとして、その事実関係については争わないものだという感覚なのである。別言すれば、たとえ非行があったにしても、それを潔く認めることが、当然のことであると、長年の教師経験から了解していたのである。しかし、この感覚を持ち続けることが困難になってきている。学校のあらゆる場面において、種々の変化が現れてきている。

一つの例から考えてみる。

ある学校で、子ども同士がけんかをした。一方が勝ち、他方が負けた。けんかは学校であってはならぬことである、ましてお互いが傷つけ合うことがあってはならぬ。しかし、残念ながら、時としてけんかは起こる。学校は特別指導という形で、両者に事情を聞き、最終的にはベストと思われる解決を図る。こう書けば簡単そうに見えるが実際は、子ども、保護者を含む多方面に大変な気遣い、配慮、労力とストレス等を要するのである。(学校現場の先生方には、「よくわかっている」と言われると思われるが) そして、両者の関係が「雨降って、地固まる」になるように願い、かつ再発防止の指導をする。もちろん、教師は事後、当事者やそれを取り巻く集団等の指導に十分注意しなければならないが、とりあえず、ここでほっとするのである。

20世紀末から21世紀なって、必ずしも、このような解決に向けての流れになりにくくなっている。負けた子どもは、下校の途中、医者に行き、診断書を取るのである。それを聞き、勝った方も、けんかであるから擦り傷ひとつしないことはないので、同じく診断書を取るのである。学校内の子どもと子どものけんかが、市民と市民の争いになるのである。

かつてほとんどの生徒間のトラブルは、教師が、いわゆる教育的配慮に基づいて、未来志向において生徒を指導し、それによって、人間としての彼らの成長を期待することができたのである。当に教師冥利につきると満足もできたのである。生徒も教師の指導を理解し、保護者も、十分納得していると思われる時、教師自身も達成感、満足感、自己有用感をも実感できたのである。一般社会も、その件を敢えて、もう一度社会の側で是非の判断をしなければならないとは考えなかったのである。

ところが、基本となる「事実そのものがない」と言われたり、「証言だけで、何か証拠でもあるのですか」と言われたり、診断書合戦となったりすると面食らうどころか、もうお手あげである。このよう話は一学校だけの話ではなく全国的に広がっているのである。

長らく公立高等学校に勤務し、現場から発信し続けた諏訪哲二は、1980年代から1990年代にかけて日本の学校の様子が大きく変わったという。つまり子どもの様子ががらりと変わってしまったという。また、彼は、「教師が子どもたちに教育的な力を加えられるのは、『子ども』(若者)たちが、『児童』や『生徒』として学校に現れた時であり、自由で主体的な『個人』として自己主張されたらもう収拾がつかない」[20]と語る。そして学校、教師は日々このようなことに直面し、苦闘していると述べている。

(2) 市民社会の典型的行動規範を身に付けた子ども

何故このようなことになったのか。ひとつの仮説を立てて考えてみたい。

自由と平等に彩られた近代市民社会の一つの面はヘーゲルもいうように「欲求の体系」[21]と呼ばれる市場システムである。そこでは市民相互の関係は対等である。その様相が、最も明確に現れるのは、経済それも消費活動である。消費活動はそれがどんな主体であっても、つまり幼い者であっても、お金を出して、もちろん親がだすのであるが、買い物をすれば、商品を渡してくれるのであ

る。そのうえ販売員は、受講した研修マニュアル通りに手を前で結び、少し上にあげながら、子どもにも丁寧にお礼を言ってくれるのである。子どもは小さい時から王様である。自分の思い通りのことをしてくれることを知るのである。

長らくどこの学校でも、この市場システム、金銭的等価交換の合理的経済原則が自分の領域内に入ってくることを是とはしなかった。

ひとつの例を挙げよう。生徒たちがバンドをつくり、私的にクリスマス・コンサートを校外で開くことになり、その鑑賞券を学校内の友人たちに販売した。このことを知った学校は、この行為を特別に指導するか、不問にするか、議論となった。（これと似た議論はどこの学校でも、起こりえることであると思われる。）

一般的に言って、教育の場である学校内では生徒同士の私的な金銭授受は適切ではないと考えられている。けれども、生徒・子どもたちの中に、この行為、つまり券の販売を不思議とは思っていないことである。自分たちの音楽行為を商品として提供することに違和感を抱いていないのである。かつてであったなら、自分たちの音楽をせいぜい「時間があったら、聞きに来てくれない？」と、無償で整理券を提供したものであった。提供された側も、即答は要請されていないので、暇な時間があったら聞きに行くし、特に親しい間柄であったら、時間を割いてでも聞きに行ってやったであろう。人と人との関係が、無償の贈与関係であり、決して商品取引における等価交換では無かったのである。

諏訪もまたこの等価交換の染みついた思考様式について、次のようなことを語っている。少し長いが引用する。校内の駐輪場は、学年・クラスとその場所を決めているが、冬の寒い朝になると遅刻寸前の者たちが違反を繰り返すので、学年から教師２名ずつを出して指導に当たったところ、三日も連続でする者がいたので、諏訪（生徒指導部長）のところに連れてこられた。喫煙やカンニング、暴力行為ではないので、彼は形式的に注意をして帰そうと思った。ただし、三日間も連続していたので、言葉で強く注意した。そのとたん、彼は、顔だけこちらにぐっと向けガンをつけ、「たった六人ぐらいで守らせようとするほうがおかしいじゃねえか。」と。

件の生徒にしてみたら、このオレ様に規則を守らせるなら相当の人数を出さないと釣り合いがとれないではないか、すなわち等価交換になっていないではないかと逆ねじを食わしたのである、と。(22)

このようなやりとりは現場では特に真新しいものではなくなってきている。自分が、等価交換に値しない、また自分に合わないと思ったものは、聞かないし、受け入れ無くてもよいと考えている生徒・子どもたちが今どんどん増加している。(23) つまり、すべてを費用と効果で計算してしまうという文化、換言すれば、現代社会に広がりの一途をたどっている市場原理主義的な思考と行動が学校内に侵入してきていると言える。加えて述べるならば、子どもだけではなく、大人や保護者の意識も学校教育を「顧客満足」で割り切ろうとする空気が広がりつつある。

5　おわりに
これからの学校教育

ポストマンは、秘密を手に入れるために、つまり読み書きの能力を得るためには、相当の時間がかかる、この習得のために子どもは隔離され、学校で教えられなければならない、これが基本的に子ども期の誕生だという。この場合、隔離とは保護であると、考えても良い。

かつてイギリス以外の諸国は、自国の弱小の産業を守るために、関税をはじめ非関税の障壁を設け、グローバルな諸規則が、無防備な国内に入り込むのを防ごうとした。その中で成長を図ろうと努力したと言われている。弱肉強食の経済合理性から生きのびていかねばならぬため、換言すれば、国内に外からの嵐を防ぐために、強固な障壁も必要と考えたのである。

教育の話に、唐突な例と思われるかも知れない。しかし、ヘーゲルの言う欲求の体系である近代市

民社会のむきだしのシステム、すなわち等価交換の原理をすべて学校に取り入れて良いわけはない。子どもたちが、消費主体として、コンビニに行って、これは自分がお金を払って手に入れても良いが、これは払うに値しないと、その都度、判断するように、学校・教室で振る舞っても良いとするなら、その学校・教室はやはり異常としか言いようがない。

自分が意義を見いだしたものはやるし、見いだせないものはやらないという基準を人生の早い学校段階で確立してしまって良いものだろうか。それは本当にこの厳しい世界や社会に乗り出していかねばならぬ子どものためになるのであろうか。

今の学校にも、これからの学校にも、子どもたちをある意味、外界から、誤解を恐れず言うならば、障壁を設けて、隔離し保護しなければならない責任が存在するのである。卑近な例を一つ挙げておくなら、スマートフォン以前携帯電話が普及しはじめたころ、多くの学校は、それは校内では必要がないので、持ち込みを禁止していたのである。学校内の空間を、通信の自由な一般社会と遮断することも、ある意味では、子どもたちにとって価値のあることと考えていたのである。

今日、教育問題をメディアが報じない日はない。学校そして教師は、バッシングの対象に、ある意味、置かれているようにも見える。しかし、全国100万人の教師が、明日からTeacherをやめ、Mentorをやめ、いわゆる先生を辞してしまって、存続できる社会をわれわれは考えることはできない。(24) 教師はやはり、今、社会と未来が必要としていることを子どもに真摯に教えているのである。子どもを主体としてみることも大切である。それと同時に子どもが教育の客体であることも忘れられてはならない。子どもは客体を通して、真の主体に成長するのである。

中世とは違って大人と子どもを分離したといわれる近代の延長上にあるわれわれは、もう一度その原点に戻って、学校という空間には、多くの先人たちが営々として作り上げてきた独自の論理のあること、また同時に大人にも、一方的な主張を単純に信じやすい、子どもっぽい大人ではなく、何ごとも十分吟味できるような成熟した大人らしい大人、ヘーゲルも言うように子どもたちに「おとなになりたいという憧れを起こさせる」大人にならねばならないことを社会の側に求めなければならない時期に至っていると、筆者は考えるのである。

最後に、ヘーゲルの200年近く前の引用を以て、本論を閉じたい。「子どもに理由を示すということは、その理由を承認するつもりがあるかどうかを子どもにまかせることであり、したがっていっさいを子どもの気ままな意向にゆだねるということである。」(25) と。

註

(1) 拙論「社会的合意における『教育の目的』についての一考察」甲南大学教職教育センター年報・研究報告書（2009年度版）2010年 pp.14-17 参照

(2) トゥーキュディデース「戦史　上」久保正彰訳　岩波文庫　1966年　第1刷（1970年第9刷）p．234

(3) クセノポン「饗宴」拙訳　兵庫県立姫路西高等学校研究集録　第14号 1993年p．6

(4) プラトン「国家」（455D-456 C）藤沢令夫訳　岩波書店1976年　pp.348-351

(5) フィリップ・アリエス「<子どもの誕生>アンシャン・レジーキ期の子供と家族生活」杉山光信、杉山恵美子訳　みすず書房　1980年

本書はまさに衝撃的であるといってもよい。もちろん学説というものが常に批判にさらされなくてはならないが、彼の提出した大枠は、初版（1960年）以来半世紀が過ぎているが、今でも大きな影響力を持っている。

(6) 前掲書　p．381

(7) 前掲書　p．381

(8) 前掲書　p．385

(9) 前掲書　p．40

(10) 「ヴェネツィアの放浪教師－中世都市と学校の誕生－」児玉善彦　平凡社　1993年　p．55

(11) 前掲書　p．7

(12) 「子どもはもういない」ニール・ポストマン、小柴　一訳　新樹社　2001年

(13) 「子ども時代を失った子どもたち」マリー・ウィン、平賀悦子訳　サイマル出版　1984年

(14) 前掲書　p．111
(15) 前掲書　p．121
(16) 前掲書　p．3
(17) 前掲書　pp．123-125
(18) 前掲書　p．131
(19) 前掲書　p．161
(20)「オレ様化する子どもたち」諏訪哲二　中央公論新社　2005年　p．15
(21)「法の哲学（世界の名著）」ヘーゲル、藤野渉、赤沢正敏訳　中央公論社　1967年　p．421
(22)「オレ様化する子どもたち」諏訪哲二　中央公論新社　2005年　pp．90-91
(23) もちろん、今の学校にも、勉強は必ずしも得意ではないが体育祭では花形になり、掃除は一生懸命するし、他の生徒には優しく面倒見良く、クラスや学校のために、献身的に尽くす生徒たちが、数多くいることを否定するものではない。彼らは、自体で光っているし、教師にも、このような生徒に出会える仕事に就けることができ、心から良かった、と思わせてくれるのである。
(24) 広田照幸は、誰でも教師が務まるかのような主張がある。「今の教師は質が低い。だから社会人からもっと自由に教師になれるような仕組みを作れ」といった議論があるが、今の勤務条件や待遇で、社会人としての経験が豊かで教師の資質と能力に富んだ人材を外部から何十万人も集めることができるとはとうてい思えない、と語っている。
広田照幸「ヒューマニティーズ教育学」岩波書店　2009年　P．2
(25)「法の哲学（世界の名著）」ヘーゲル、藤野渉、赤沢正敏訳　中央公論社　1967年　P．402